長六年本殿以下の諸堂宇及び別當長樂寺を再營し、草高百十一石五斗八升八合を寄進し、事ある毎に白山比咩神社と共に祈禱を命ぜられた。天保七年十一月四日門前の民屋から出火して、長樂寺以外皆燒亡し、神體を假殿に遷座せしめ、明治元年神佛混淆禁止の後、本地俱利伽羅不動明王を廢して素盞嗚社と號し、別當長樂寺を復飾奉仕せしめて社號を素盞嗚社と改め、五年七月更に手向社と稱し、七年六月手向神社と呼ぶことにした。→チョウラクジ　長樂寺(河北)。

タムライチ　田村都　河北郡俵等の人、幼にして明を失ひ、金澤に來り、琴を以て士庶の間に遊び、又和歌を好んで隨翁と號した。弘化二年六月二十日四十一歳を以て歿し、門人碑を野田山に樹てた。

タムラゴンザエモン　田村權左右衞門　古九谷最初期の陶工である。古九谷燒の陶窯のあつた江沼郡九谷村の鎭守九谷社には、青華を以て『南無八幡大菩薩、明暦元年六月廿六日田村權左右衞門』と書いた花瓶が奉納せられてゐた。大聖寺實性院の過去帳に、『天和三年三月五日忍翁宗利居士、田村權十郎父』とあるが、これこそ前記田村權左右衞門でないかと言はれてゐる。

タメシモノ　試物　萬治四年三月廿九日の令に、途中に行たふれ果候者、又は川流死候もの有之刻、猥ためし物に仕候儀堅御停止云々。』とある。

タメヒロヅカノサイキ　爲廣塚の細記　→ヒロヅカサイキ　廣塚細記。

タモジョウ　多茂城　鹿島郡武部に在つたといひ、今堡址は明らかでないが、武部判官師澄の居であると傳へる。

タモトグサ　多母登草　七册。由比勝生著。跋に元祿十四辛巳年九月廿六日六十六歳勝生とある。著者が六十歳を過ぎて渉獵した雜記中、多く前田家に關することを集めたものである。

タヤ　田屋　河北郡笠野郷に屬する部落。

タユウノモリ　大夫ノ森　鳳至郡前波の出崎なる丸山を津無良島とよび、そこに生茂つた森を大夫ノ森といふ。昔猿樂大夫諸橋氏の屋敷がこの傍に在つたからの名であると傳へる。

タラジマ　鱈島　鹿島郡能登島なる久木部落の沖に在る島。

ダラニ　陀羅尼　刀鍛冶の苗字。勝家・家重・勝田の系中に陀羅尼橘某と銘じたものが見られる。又松戸氏をも稱する。

ダラニカヂマチ　陀羅尼鍛冶町　金澤常福寺の寺記に、慶長十二年陀羅尼鍛冶町に建立したことが見える。陀羅尼鍛冶町の名はこの外に所見がないが、後に常福寺上地町といった袋町の尻地で、陀羅尼鍛冶の居住してゐた所と見える。

ダラニロクゾウ　陀羅尼六藏　刀工で、元和四年廿六歳の時、金澤山崎町田上屋彌右衞門妻たれ廿五歳と密通し、その夫を殺害した罪により、兩人共に泉野にて釜煎に處せられた。

タラヲサナイ　多羅尾左內　初めて前田利長に仕へて二百石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。

タラヲモリシヅ　多羅尾守靜　通稱左一郎。寛政元年幼にして父左內の祿三の一を襲ぎ、六年本知二百石に復し、九年前田齊廣の御側小將から表小將を經、文化二年逼塞を命ぜられ、文政元年頭並改作奉行・御勝手方より次第に昇進し、御馬廻頭に至り、天保六年百石を增し、九年六月九日歿した。

タラヲロクベエ　多羅尾六兵衞　父は竹內大膳。六兵衞前田利常に仕へて四百石を受け、母の氏を冒し、延寶五年歿。子孫四代八平次に至つて斷絕した。

タルヒメジンジヤ　垂比咩神社　式外の國史見在社であるが、所在は詳かでない。三代實錄に陽成天皇元慶三年六月廿三日、加賀國正六位上垂比咩神に從五位下を授けるとある。今能美郡大杉に足比咩神社がある。それかも知れぬ。

タルヒメジンジヤ　足比賣神社　能美郡大杉谷に鎭座する。神殿の北側にある大欅は、胸高周圍六米三、根と幹との境では七米、樹高二三米許り、樹幹は扁平で兩幹の密着した如くであり、やがて兩幹に分岐してゐる。

ダルマイハ　達磨岩　鳳至郡赤崎の北端瀨ヶ崎に在る。高さ一五〇米內外、周圍一三米許。世俗に赤崎の權現樣と稱する。能登名跡志に、『礒邊に達磨石とてさながらなる大石あり。淺香氏通りて狂歌、往古より立すくみたる達磨石九年面壁ものゝかずかは。』と記する。

ダルマジ　達磨寺　石川郡宮腰にあつた。龜尾記に、石川郡宮腰達磨町は、達磨寺のあつた所であるとある。

タルミ　樽見　鳳至郡七浦庄に屬する部落。能登名跡志に、『樽見村とて山中に在る村なり。皆月より三十町餘なり。昔は礒邊に在りしに、其頃はがせ作の大船、沖に雖風にあひ、此礒に寄りしを、此村の者共情なき者共にて、船中の者共弱りありしを不殘打殺し、荷物を奪ひ取りし報にて、大浪打て一村殘らず家居を打崩せり。其後も度々なる故此山中へ家居せしに、家立揃ふと地崩れて、家一軒もなくなること數百年の間同じ。近年も明和年中、一村地の深さ三丈許落入り、家殘らず崩れたり。』とある。

タルミ　垂水　珠洲郡眞浦の內の小字。

タルミノタキ　垂水の瀧　珠洲郡眞浦小字垂水の海岸に在つて、その水直に海に落下する。高さ三五米、幅二米。

タルミダキ　樽見瀧　羽咋郡寶達山の東麓野田から發する溪流に懸り、下流子浦川の源となる。一に垂水瀧に作り、又陰陽瀧ともいふ。三州奇談に、『此瀧月毎に、下十五日・上十五日と落る所を替るなり。幾度試みても替ること相違なし。尤も下る水路はありといふとも、風によるか木の葉の隔るによるか、若くは汐時によるか、或は西に落ち東に落るなり。不思議目のあたりにて、其理を分つべき方なし。』とある。

タロサクマサムネ　太郎作正宗　前田家藏、正宗作の名刀で磨上二尺一寸二分。もと水野和泉守忠重の一族太郎作淸久の有したもの。太郎作は之を以て敵の冑の上から打下した所、その齒まで切つたといひ、今切先から八寸五分の所に小さな刄こぼれがある。又切先から五寸二分の極の中に四角な小さい穴のあるのは敵の矢の當つた跡である。之が前田氏に傳はつた由來は、秀忠の養女が光高に嫁した時堺引出物の一として贈られたものであるといふ。